

書評

日比 嘉高 著

『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所』

北川 扶生子

人・モノ・情報の移動と定着は文化の生産にどのように関わるのだろうか。本書はこの問題を、日系アメリカ移民の日本語による文学活動を例に、一九〇〇年頃から一九四五年に至る時期に注目して考察するものである。

「日本（人）のアメリカ」という意味を持つ本書のタイトルは、「日本」と「アメリカ」双方の「日常的な意味における自明さをいったん括弧にくくり」、両者の入り組んだ関係を考える意味をこめて選ばれたという。

人文社会科学の諸領域において、研究対象はいまだ国別・地域別に編成される傾向がある。そのような体制のもとで〈境域〉の文学は周縁化されがちだ。日系アメリカ移民の日本語文学も、周縁化されたマイナー文学のひとつである。しかし、この〈境域〉性こそが批評性の源となる。日本と米国、祖国の文化と新世界の文化、日本語と英語、出稼ぎと定住、移動と定着、日本への愛憎、米国への愛憎、「日本人」のアイデンティティと「米国

人」のアイデンティティといった、様々なものの狭間における戸惑いと混乱に眼を凝らすことで、私たちの固定観念に揺さぶりをかけることができるのだ。以上のような〈境域〉の対象への戦略的な注目が、本書の大きな枠組みである。

本書がはらむもうひとつの〈境域性〉は、研究方法に関するものだ。移民研究は、社会学、歴史学、人類学、地理学、教育史、宗教学、音楽研究など多分野の研究が相互乗り入れる領域であり、既存の学術領域^{ディシプリン}の境界の再考を迫るものでもある。では、文学研究はここにいかに寄与できるのか。この問題が、本研究を進めながら著者が考えていたことだという。結論から言えば、文学研究は二つの点から移民研究に寄与できるという。ひとつは文学的叙述がはらむ細部の描写、そしてもうひとつは想像力——とりわけ、人々が自分たちを集団として構成していく際の——である。

このような問題意識と方法的見通しのもと、本書は四部から構成され、おおむね時代順に日系アメリカ移民の文学を検討している。「I アメリカに渡る法」では、二〇世紀初頭の渡米案内書と渡米小説が検討される。また、日米間を往来する船中という宙ぶりの時空間が生む物語が、永井荷風『あめりか物語』（一九〇八年）の「船室夜話^{カボタ}」を通して眺められる。「II サンフランシスコ、日本語空間の誕生」では文学を可能にする新聞や書店という「文化的基^{アイフラットランド}」に焦点が当てられ、一八九四年創刊の邦字紙「新世界」や、日本語書籍・雑誌を扱う書店の役割が明らかにされる。「III 異土の文学」「IV 移動の時代に」には、様々な具体例を検討する九編の論考が並ぶ。以下、内容を詳しく辿り、本書を貫く問題について検討したい。

「I アメリカに渡る法」の「第一章 移民の想像力——渡米言説と文学テクストのビジョン」では、一九〇一年頃から数多く発行された渡米案内書と渡米小説との隣接性が論じられる。渡米小説は、娯楽的で楽天的な冒険物語の側面を持ちつつ、渡米後の厳しい現実を語る現地情報とも地続きだった。小説という言語形態は、「ある種の情報の一群をもっとも効率よく聞き手／読み手に伝えるために選ばれる伝達の手段」であり「世界を再現」す

る力を持つ。経済的要因のみならず、こうした物語と想像の力もまた人々を動かしたのであり、その力は、渡米しなかった人々の想像力にも訴えかけて、彼らの世界像を構築したのである。

「第二章 船の文学」では、船中という場面が多くの文学作品を産み出してきたことが指摘される。そしてそのひとつである永井荷風「船室夜話」が、はじめ『文芸倶楽部』の雑録欄に発表されたことに注目し、本作を、近代文学を代表する「文豪・永井荷風の初期作品」と位置付けるのではなく、「人々を渡米に駆り立てる移民送出の言説」のなかに置き直す。このような視点の変更によって、このテクストが小説というよりも「米国に旅する人の見聞録としての性格をより強く示していたはずであり、荷風もまた帰国しないかもしれない旅の途中にあったことが確認される。

これら二つの章では、日本国内の人々にとって、米国イメージを形成し、渡航を決意させる大きな力を、渡米案内書を渡航小説とがともに発揮していた状況が明らかにされる。ここでは、フィクションとノンフィクションの境界はわれわれが思うよりずっと曖昧だ。

「II サンフランシスコ、日本語空間の誕生」では、「文学」が可能になるためにはどのような環境が必要か

という問題を考察するための、格好の場として移民地の日本語空間が検討される。「第3章 日本語新聞と文学」では、日本国内で発行された新聞や雑誌が、ひと月弱ほどの時差で大量に移民地において流通していたことが、取次を行った日本書店（日本語書籍・雑誌を主に商っていた書店）の広告から明らかにされる。また、雑誌や単行本の形態で発表されることは少なかった日系一世たちの文学の、主要な発表の場は邦字紙であったこと、そして、代表的邦字紙に掲載された文学のジャンルや担い手が明らかにされる。

「第4章 移民と日本書店——サンフランシスコを中心に」では、日本国内発行物とともに流通していた移民地発行の新聞・雑誌・書籍を概観した上で、それらの情報の中継点となった日本書店の歴史がまとめられる。一九一〇年のピーク時で、サンフランシスコには八軒の日本書店があり、日本語書籍の販売・取次のほか多角的な経営を行い、太平洋を隔てた「飛び地」の文化の循環・創出の結節点^ブとして機能していたことが明らかにされる。さらに「第5章 ある日本書店のミクロストリア——五車堂の場合」において、そのような書店のひとつ「五車堂」の歴史がたどられる。

これらの論考は、移民地において、日本国内とほぼ変

わらない、場合によっては国内の地方よりも充実した日本語印刷物の流通が確保されていたことを明らかにし、現地米国社会における体験の反映を重視してきた従来の日系移民文学研究の土台を変えたと言える。著者には朝鮮半島における日本書店の調査もあるが（『朝鮮半島における日本語書店の展開 戦前外地の書物流通（1）』、『跨境／日本語文学研究』創刊号、二〇一四年六月）、ローカルなコミュニティにおける新聞と書店の役割が文学の基盤であるとの指摘は、たとえば日本国内の地方書店の役割に関する研究などともつながっていくのではないか。

「Ⅲ 異土の文学」および「Ⅳ 移動の時代に」では、様々な作品が個別に検討される。「第6章 一世、その初期文学の世界」では初期日系日本語文学が新聞雑誌の文芸欄から概観される。この調査から、邦字新聞雑誌の誕生とほぼ同時に文芸欄が設けられていること、文芸欄のジャンル構成が国内新聞とほぼ同じであることが明らかにされる。そして初期日系移民文学の特質として、「内輪性と公器性の共存」「遊戯性、諷刺性」「修辭的「慣性」と写実性（当地性）」との葛藤^フが挙げられる。

「第7章 漱石の「猫」の見たアメリカ」では、日系移民一世のジャーナリスト・保坂婦一の小説「吾輩の見たる亜米利加」（一九一三〜四年）が論じられる。数多

く発表された漱石「猫」の焼き直し作品を検討することは、トップエリートか下層民に焦点をあてがちな移民研究に対し、中等教育層の生活と文化に光を当てる作業になる。さらに、ディテールを描く文学は、移民の姿を生きた書き残してくれている。本作は、出稼ぎから定住へと変化した始めた移民たちの意識を反映している。しかし、帝国主義体制を「外部」から見る目を保証するはずの「猫」という装置は本作ではうまく機能せず、祖国日本に貢献する移民への配慮を政府に求める切実な要求は、中国系やアフリカ系の人々への差別意識を内包した帝国主義の言説として表出されてしまったという。

「第8章 永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」および「第9章 転落の恐怖と慰安——永井荷風「暁」を読む」は、一枚岩ではない日系コミュニティにおいて荷風は、上層階級に属する者として下層階級移民たちの世界を描いたこと、荷風が帰国したから本作が「日本文学」と理解されたが、本作に描かれる留学生から労働移民への「転落」（とその慰安）は、多くの一世がたどった道であり、在米日本人となったかもしれぬ自身の姿の仮想であったはずである、という。

「第10章 絡みあう「並木」——太平洋兩岸の自然主義文学」は島崎藤村「並木」（一九〇七年）と、サンフ

ランシスコの移民文士・岡蘆丘（くさきやう）による「並木」（一九一〇年）を比較したもの。社会に適応して生きてゆくためには、個人は「並木」のように画一化されざるをえないという見方を、岡は藤村から受け継いでいるように見えるが、このような見解が展開される社会的文脈は両者で大きく異なる。日露戦後の閉塞感を指示する藤村作に対し、岡のテクストにおける「並木」の比喩は、日系移民の多様性がアメリカ社会ではステレオタイプで塗りつぶされてしまう状況を指しているのである。

「第11章 洋上の渡米花嫁——有島武郎「或る女のグリンプス」と女の移民史」では、海を渡る女をめぐる表象のなかに主人公・田鶴子を置き、その意義と限界を再評価する。一九一〇年代に八千人から九千人の写真花嫁が渡米したと言われるが、彼女らのイメージはしばしば「醜業婦」と緋い交ぜにされた。海を越える女たちをめぐる「想像力は、性、家父長制、帝国主義的海外発展など多重の意味において、女の意味と身体を自らの支配下におきコントロールしようという、（男性的な）領土化の欲望によって支えられていた」という。

「第12章 移植樹のダンス——翁久允と「移民地文芸論」」では、北米の日系移民作家のなかで、これまでほとんど注目されてきた翁の文学の意義が再検討される。出

稼ぎから定住へという日系移民社会の変化を反映した作家として、米国に生きる日系人の文学の祖と位置づけられてきた翁だが、その核となる言説で用いられる表現や発想は、自然主義文学や鈴木三重吉ら同時代の日本文学に由来している。日本国内の言説に由来する語彙が、移民地の現実を発見してゆくという事態も起こっている。

また「ローカル・カラー」を作品に取り入れようとする自然主義文学の動向が、目の前の米国日系移民社会を挟む翁の作風の指針となってもいる。この意味で翁の文学は、その発想の根幹を、日本国内の言説に負っているものであり、米国の現実を反映したものと単純に捉えることはできないのである。表現への注目し著者の日本近代文学研究者としての蓄積が生かされた論考であり、日本国内の印刷物が広く移民地で読まれていたことを明らかにした、本書第二部での研究成果を踏まえた具体例の再検討による成果でもある。

「第13章 望郷のハワイ——二世作家中島直人の軌跡」では、昭和文壇史を彩るひとつのエピソードとしてしか知られていなかった、ハワイ二世作家・中島直人の『ハワイ物語』をとりあげ、その「狭間からの声」に耳を澄ます。中島の文学は、人と文学の移動による文化生成の現場への入口となる点、同時代の日本国内のモダンズム

文芸の素養も身につけつつハワイで公教育を受けたという混成的な教養のあり方などの興味深い点をほらむが、もっとも重要なのは、「あるシステムの内部——強い権力をもつ——と外部——排除されると同時に必要とされる——に同時に存在する／させられた者たちの引き裂かれた意識」を刻み込んでいる点である。「二つの文化の狭間に落ち込んだ者たちの痛み」を響かせているという点で中島の文学は今のわれわれが聞き届けるべき声を響かせている。

「第14章 〈文〉をたよりに——日系アメリカ移民構成収容下の文学活動」は、第二次世界大戦中に日系人が送られた強制収容所における文学活動を取りあげる。ここでいう〈文〉とは、「書き記したもの、書物、手紙」といった意味を包含するものだ。収容所は私たちの社会の母型とも言えるものだが、極限状況においても人は文学を必要とし、文学は人をつないだ。収容所では文学サークルが速やかに発足したという。そして収容生活という現実との折り合いをつけるべく綴られた彼らの文学に、反復して現れるイメージは、旅と文である。彼らが書き残した者は、未来の歴史家に差し出された手紙と解釈できるものであり、収容所で書かれた「〈文〉」は厳しい試験を科された少数者が、多数者の書く歴史を別の道筋で

たどり直し、いつの日か書き換えるために残した言葉の地図」とも受け取れるものだ。

以上のように本書は、移民研究と日本近代文学研究というふたつの領域における研究の蓄積を十分に生かし、両者を架橋する達成であり、個別の事例・作品研究を超えて、分析概念や研究方法、研究の前提条件に変更を迫る大きな成果である。とりわけ、移民地における日本語印刷物の流通の有様の解明は、移民文学研究の土台を変えた。また、自然主義文学の「ローカル・カラー」重視の方針が、移民地の現実と書き手達を向き合わせる一助となった可能性があること、日本国内の印刷物を手厚く素早くフォローしたことによって、彼ら自身が書く際に用いる日本語の語彙や表現のレベルにそうした内地の発想が入り込んでいることを指摘した点は、日本近代文学研究が移民研究に寄与するものであり、両領域の接続の成果と言えるだろう。

初出一覧によれば、本書に収録された論考のうち、もっとも早いものは二〇〇四年に発表されており、本書は著者のほぼ一〇年にわたる論考を収めている。日系アメリカ移民文学に関する著者の研究は、この領域を切り開く先駆的なものであり、論文として発表された際から多くの恩恵を受けてきた。しかし、この度一冊の書物として

上梓されたものを通読して感じたのは、鮮やかな断面を見せながら立ち上がってくる歴史の姿である。旅をした本との出会いから始まる本書は、読むことと書くことをめぐる切実な営みを、時代ごとに色鮮やかに切り取りながら、それらの場面を大きな歴史の流れに接続してゆく。海に向こうへの熱い思いをかきたてた渡米本と渡米小説。戦後収容所から店主が戻ってきたところ、すべて残っていた日本書店・五車堂の棚の本（読めない本だから誰も盗まなかったのである）。収容所の日本語図書館でひととき祖国の時空を生きる人々。必ずしも後世に名を残したのではない人々の、読むことと書くことをめぐるドラマがつくりだする歴史の流れが、生き生きと立ち上がってくる。

今ひとつ、本書を読みながら感じたのは、著者が冒頭で述べていた「細部の描写」の力であり、その細部の力によって、様々な固定観念が丹念にときほぐされてゆく心地よさであった。日本人とアメリカ人、故国／郷土と移住地、男と女、プロとアマチュア、メジャーとマイナー、オリジナルとパロディ、フィクションとノンフィクション。我々が思考の前提としがちな二項対立が、それらに抗う「狭間からの声」に耳を澄ませ寄り添うことで新しく編み直されてゆく。

たとえば文学をめぐる制度について言えば、渡米勸奨本や米国見聞記と、渡米体験を描く小説との近接性をめぐる考察（第1・7・8・9章）は、小説というジャンルが持つ細部描写の力や、情報パッケージ化機能の効用が、小説ジャンル内部にとどまらないものであることを指摘している。そもそも、小説というジャンルの出現は、宗教的世界観の世俗化と新世界の驚異への関心の移行という世界史上の転換点に深く根ざしていた。北米という新世界の発見が、日本国内で出来上がりつつあった小説Ⅱ虚構という概念に逆らい、小説の別の可能性を押し広げた、と見ることもできる。

さらに、本書冒頭で問題にされる「文学テクストの強度」と移民文学の関連についても考えさせられた。日系移民文学をとりあげるのはしばしば、マス・メディアやマーケットの力を介さない、ローカルなコミュニティにおける文学言説の流通を取り上げることだ。収容所の読み書き活動、自費出版、発行部数数百部程度の民族紙などが、読解の対象となることが少なくない。移民文学を論ずることは、マーケットに乗らない、ローカルなコミュニティにおけるメディアのありかた・文学作品の流通・読者との関係を論ずることもある。その作業は、メジャーを決定する基準は何かという問いかけにつながる

る。移民文学はレベルが低いのか、それは誰がどうやって決めるのか、コンテクスト抜きに読めるテクストの自律性とは芸術を測る万能の物差しなのか。メジャーとマイナー、プロとアマチュア、芸術作品と歴史資料、等々を区分けする力とはどのようなものか。こうした問いかけを、移民文学研究という領域ははらむ。

アマチュアの筆になる「稚拙」な文章や、文脈に依存する度合いが高い「作品」が、地理的・歴史的空間や共同体像を想像させる力を強く持ちうる例は少なくないように思われる。では、「作品の強度」や「芸術性」という分節は、どの段階で問題になるのだろうか。本書末尾の収容所における文学活動を論じた最終章は、こうした問いへの答のように読むこともできると思われた。

最終章で著者は、〈文〉という概念を用いることで、文学作品と日記や手紙という、フィクションとノンフィクションの境界、職業的作家と素人の書き手といった境界をすべて取り払う。われわれの社会の母型とも言える閉ざされた収容所の空間で、慣れ親しんだ言葉で読むことと書くこと。そのことで人が生き延びるということ。その事実の前では、こうした境界は二次的なものに過ぎないということを、ここで著者は見出しているようにも見える。

本書は、国境の狭間、歴史の狭間に陥ったものたちの、一度は「大きな歴史」に塗りつぶされかけた小さな声に、耳を傾け、彼らの思いをすくい上げ、受け止める。その作業はまた、私たちの日常を形作る強固な固定観念を、丹念に解きほぐし、編み直すものでもある。

こうした作業の果てに著者が目指すのは、新しい、あるべき歴史の姿であり、現在流通する歴史観の描き直しだろう。このような意味において、本書における細部の力の賦活と、その力への信頼（それは文学への信頼につながる）は、極めて倫理的な意志に貫かれたものだ。本書末尾で著者は「〈文〉へ託す希望」を語る。この希望はまた、本書をここまで読み進めてきた読者のものでもある。

尚、本書末尾には「人名・作品索引」「事項索引」のほか、三つの資料が添えられている。ひとつめは、サンフランシスコで一八九八年頃に発行された雑誌『そうこう桑港のしりしり』第壹——六編 総目次』であり、もうひとつは、第13章で論じられたハワイの二世作家「中島直人著作目録稿」三つめは、「北米日系移民文学・文化史関連年表」である。いずれも資料的価値が高く、今後の研究に大きく資するものである。また、著者近刊の『コレクション モダン都市文化 第92巻 北米への移民』（ゆまに書房、

二〇一三年一月）は、本書でとりあげられた中島直人『ハワイ物語』を復刻収録しており、全文を読むことができる。さらに、同書に付された「関連年表」は、外地で発表された作品、外地を舞台とする作品、外地で発行された新聞や人の動きなどを整理しており、本書の年表と併せて利用することで国内外の文学活動をめぐる展望を得ることができる。

二〇一四年二月刊、新曜社、A5判、三九二頁、

四、二〇〇円＋税）

（きたがわ・ふきこ／天理大学）